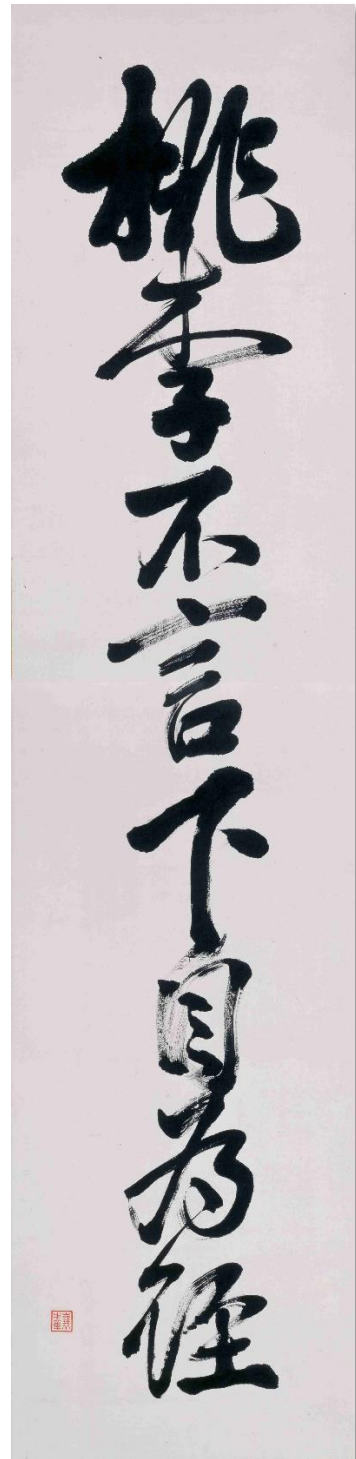




同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第8期展
「新島襄の遺した言葉」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第8期展
「新島襄の遺した言葉」

会期：2018年9月14日～2019年3月中旬

会場：同志社京田辺会堂光館ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：左 新島襄筆一行書「寧為玉碎恥瓦全」 右 新島襄筆一行書「桃李不言下自為徑」

ごあいさつ

2015年3月の献堂以来、同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）で1 Semesterごとに行ってきた一連の展示は、一般的な学部学生の在学期間である4年（8 Semester）を1タームとした企画で、今回で8期目となりました。すなわち最初の一区切りを迎えることとなりました。今回のテーマは、最終 Semester ということもあって「新島襄の遺した言葉」といたしました。現代の私たちにとっても、新島が遺した言葉から創立者の人間味あふれた魅力に迫ることができるかと確信しているからです。

新島が遺した言葉は数多くあり、入学式や卒業式をはじめとしてさまざまな場面で引用され、使用頻度の高い言葉もあります。「倜儻不羈」や、各校地にある良心碑に刻まれている「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起り来ラン事ヲ」は、おなじみの言葉ではないでしょうか。

そうしたなかで今回は、キリスト教文化センターの掲示板に掲示されている墨書（「聖書のことば」と「新島襄のことば」）でとりあげられた言葉や、経済雑誌の『プレジデント』に18回にわたって掲載された「新島襄のメッセージ」というコーナーで紹介された言葉を参考にしながら、新島の教育者としての側面とクリスチャン（宣教師）としての側面という2つの側面を象徴する言葉を選んで展示いたしました。新島は、教育者として同志社の学生や若い卒業生宛に多くの手紙を書いています。そこには彼の心中の苦悩や期待、教育理念が忌憚なく表明されています。そして教会の設立やクリスチャンの育成にも渾身の情熱を注ぎました。キリスト教を徳育の基本とする教育と、教会という2つの要素を起爆剤として、封建日本を打破し、精神的な近代化を成し遂げようとしたのです。新島にとって、「学術」と「信仰」は車の両輪のようなものであったのです。

キリスト教文化センターは、学生や教職員のみなさんが同志社大学のキリスト教主義を知り、建学の精神についての理解を深めてもらえるよう努力しています。それは、学生のみなさんが学生生活を通して同志社大学のキリスト教主義について学び、考えながら良心を育むことで、卒業後にそれぞれの場所で社会のためにその力を発揮することができるように、と願っているからなのです。この展示がその一助となれば幸いです。

同志社大学キリスト教文化センター所長
横井 和彦
2018年9月

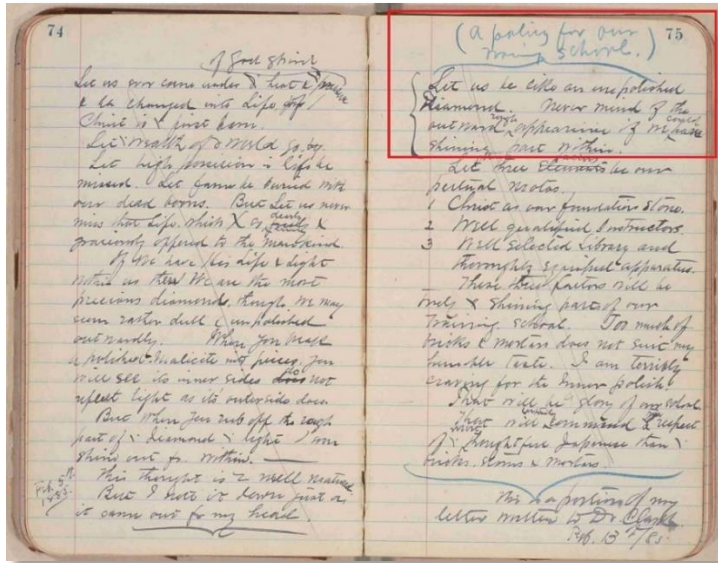
目次

| | |
|----------------------|----|
| ごあいさつ..... | 1 |
| 展示テーマ「教育者として」..... | 3 |
| 展示テーマ「キリスト者として」..... | 13 |
| 資料リスト・写真リスト..... | 23 |

展示テーマ

「教育者として」

新島襄が同志社英学校で担当した授業はそれほど多くはありませんでした。むしろ、学校長として学校の円滑な運営に力を傾注した人物です。しかし、新島はこれまで教育者として多くの人々に語り継がれてきました。その理由は、新島が書き残した言葉からも窺われます。ここでは新島が遺した言葉から新島の教育者としての姿を物語る資料を展示します。



〔赤枠内〕

Let us be like an unpolished Diamond. Never mind of the outward rough appearance if we could have shining part within.

磨く前のダイヤモンドのようであれ。内に輝くものがあるならば、荒削りの見かけを決して気にしてはいけない。

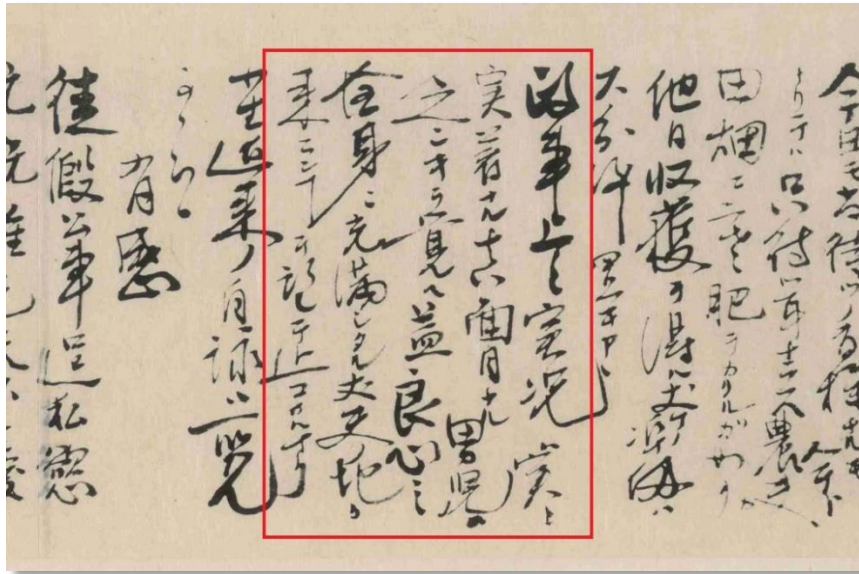
雑記帖 (複製) 1883年 1冊 19.5×12cm

新島が1883年(明治16)ごろから使用していた雑記帖です。その75ページ目にアメリカン・ボードのN. G. クラークに宛てた書簡内容の抜書きがあります。青字で「A policy for our training school」(我が校の方針)と書かれた言葉の下に文言(赤枠内)から、新島が英学校の生徒に対して求めていた姿勢が窺えます。【赤枠内の文言は『PRESIDENT』第53巻第4号(2015年1月26日発行)掲載】



自責の杖 (複製) 明治時代 3片 最大60cm

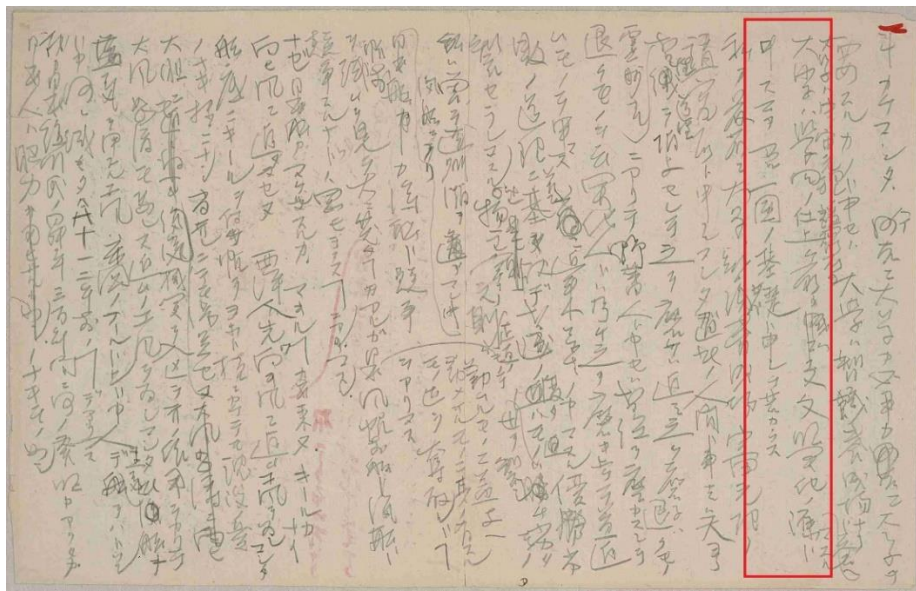
打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年(明治13)4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく校長である自らの責任として、自らの手を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰に係わる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれています。



〔赤枠内〕
政事上之実況ハ実ニ実着ナル真面目ナル
男児ノ乏シキヲ覺ヘ益良心之全身ニ充滿
シタル丈夫ノ起リ来ランコトヲ望テ止マ
サルナリ

横田安止宛新島襄書簡 (複製、部分) 1889年11月23日付 1通 18×169cm

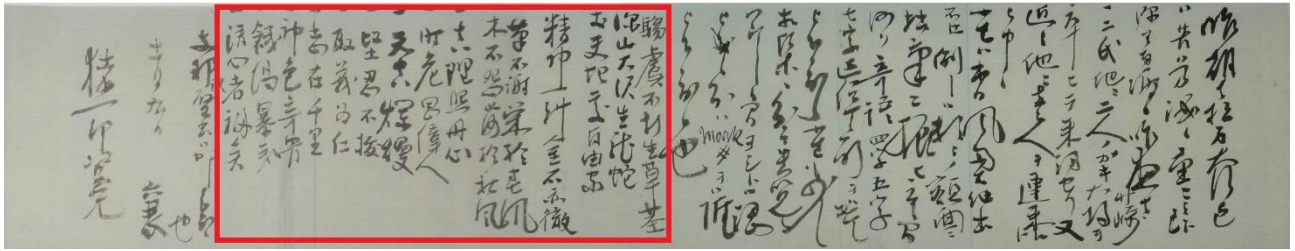
新島が1889年(明治22)11月23日、療養先の東京から同志社普通学校5年生の横田安止に送った手紙です。新島は憲法が發布され、国会開設を間近に控えた国家がどうあるべきかを手紙で語っています。また、この文中に、「良心」を表象する一文「良心之全身ニ充滿シタル丈夫ノ起リ来ラン事ヲ望テ止マサルナリ」があります。新島の教育理念の象徴であるこの文言は、現在石碑に刻まれ「良心碑」となり、同志社諸学校や、新島の母校であるアメリカのフィリップス・アカデミーなどに建立されています。



〔赤枠内〕
大学ハ学問ノ仕上ケ所ト成リ又文明開化ノ源
ト申スマタ否一國ノ基礎ト申シテ苦カラス

演説草稿 (複製、部分) 1888年4月12日 4枚 21×33cm

1888年(明治21)4月12日に知恩院で開催された集会で、新島が大学設立について演説したときの草稿です。大学設立のための募金を訴える内容ですが、新島が考えていた大学が日本においてどのような意味を持つかを新島自身の言葉で示しています。新島にとって大学とは、学問を仕上げる場所であり、同時に文明を創出し、発展させる国の基礎となる、社会を構成する重大な要素でした。【赤枠内は『PRESIDENT』第53巻第18号(2015年6月22日発行)掲載】

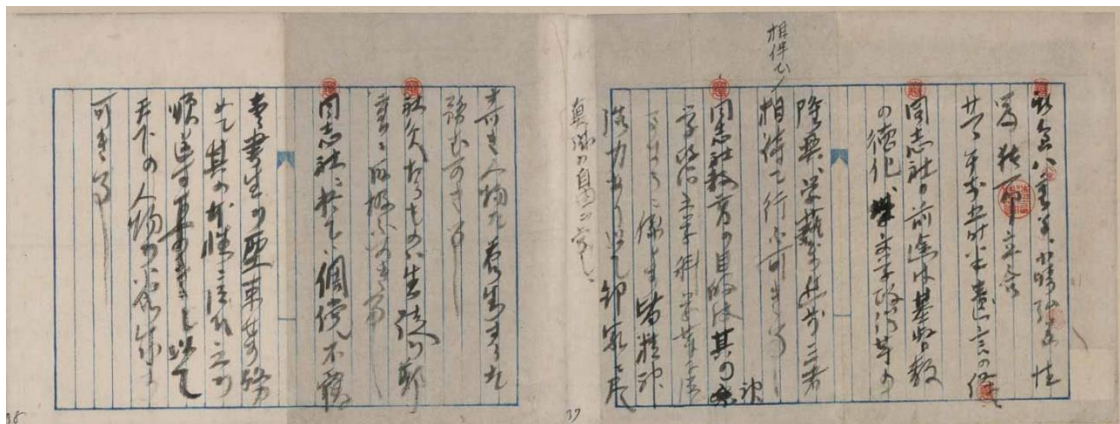


〔赤枠内〕

騶虞不折生草莖
 深山大沢生竜蛇
 丈夫起処自由家
 精神一到金石亦徹
 草不謝榮於春風
 木不怨落於秋風
 真理照丹心
 時危思偉人
 天真爛漫
 堅忍不拔
 取義為仁
 志在千里
 神色奇骨
 饑渴暴義
 清心者福矣

徳富猪一郎宛新島襄書簡 (複製) 1889年11月9日付 1通 15.9×81.1cm

1889年(明治22)11月9日付で新島が徳富猪一郎に宛てた手紙です。猪一郎の求めに応じて揮毫するための文言の候補が羅列されています。思いつくままに書き出した候補の文言ですが、新島自身が誰かのために書くのであればという視点でこれらの言葉を改めて読むと、新島の人柄や理想を知ることができます。



新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎立合廿一日午前五時半遺言の条々

同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行ふ可き事

同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事する二係らず皆精神活力あり真誠の自由ヲ愛し以て邦家ニ尽す可き人物を養成するを務む可き事

社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

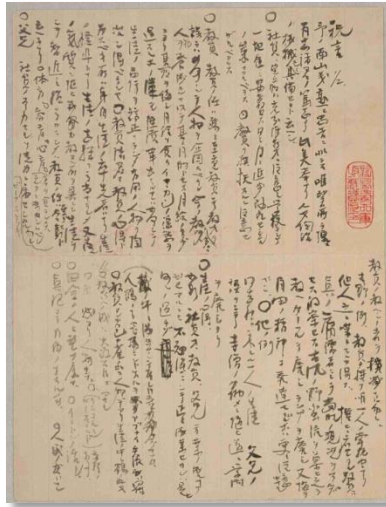
同志社ニ於てハ個儻不羈なる書生ヲ壓束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事

※押印は省略

新島襄遺言 (複製、部分) 1890年1月21日 1巻 24.5×200cm

新島が永眠する2日前、1890年(明治23)1月21日、妻の八重、教え子の小崎弘道と徳富猪一郎が立ち会ってしたためられた遺言です。同志社に対しては、自制し、真摯に教育活動や学校運営を行うこと、生徒には丁重に接し、個性を活かしながら導くことなどが書かれています。

<南山義塾と新島襄>



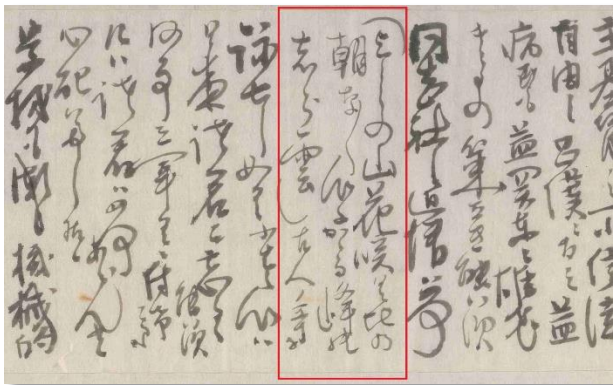
新島襄筆草稿「祝言」1882年



南山義塾跡碑

南山義塾は1882年（明治15）4月30日に現在の京田辺の地で開校した私塾です。同志社国際中学校・高等学校南側にある普賢寺川沿いに存在したと考えられます。新島襄は南山義塾の開校式に出席し、祝辞を述べました。その草稿には、教員としてのあるべき姿や、学生の心得、生徒の父兄のあり方が記されており、中には「○体育 ○智育 ○心育」という文字もあります。知育に偏重しない教育の重要性に対する新島の認識は一貫しています。これが同志社と京田辺の最初の接点です。

<よしの山 花咲く頃の 朝な朝な 心にかかる 峰のしら雲>



横田安止宛新島襄書簡 1889年12月30日付

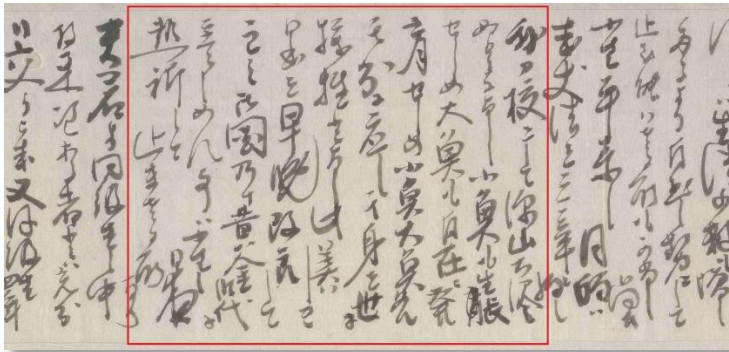


集合写真：自責の杖、和歌「よしの山」と2年生上級組

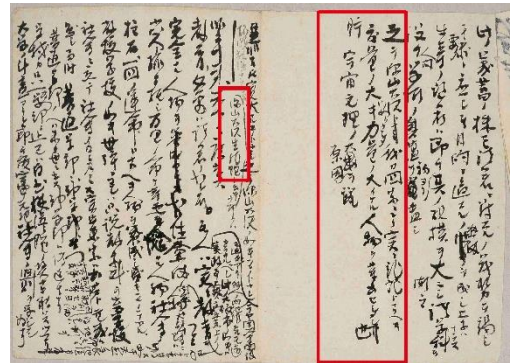
この和歌には、吉野山の花が散ってしまうことが気が気でないように、生徒たちのことが気がかりでならない、という新島の気持ちが込められています。新島はこの和歌を学生への手紙に書き記すことがありましたが、墨書された和歌と、自責の杖と問題を起した生徒たちが写った写真がもっとも象徴的です。1880年（明治13）上級組と下級組に入学時で分けられていた同志社英学校2年生らを1つのクラスに合併することを学校が決定すると、これを伝聞した上級組の生徒たちが、授業をボイコットすることで抗議の意を示しました。ボイコットに対しては1週間の外出禁止という処罰が課せられます。この処罰は後に取り下げられますが、取り下げられた翌日の朝礼の時に、新島は学生らの問題の責任は自身にあるとして、持っていた杖で自らの掌を打ち付けました。そのときに折れた杖が自責の杖として伝わり、当時の新島の心情を物語る文言として吉野山の和歌が現代まで伝わっています。

しんざんだいたく
 <深山大沢>

キリスト教文化センター墨書「新島襄のことば」(2013年度1月)掲載



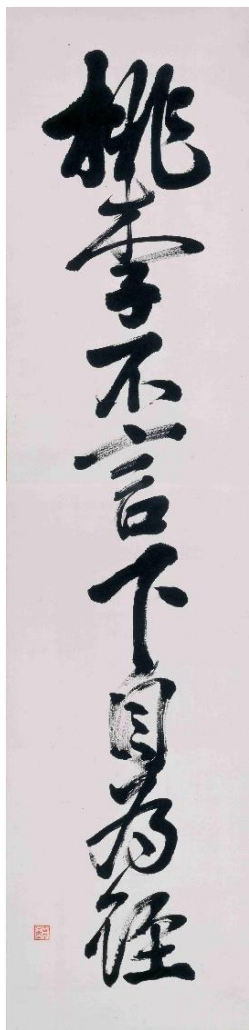
横田安止宛新島襄書簡 1889年12月30日付



大学設立募金に関する演説の草稿

深山大沢とは、中国の古典籍『春秋佐氏伝』「襄公二十一年」の項目にある言葉です。傑出した人物を育てる、規模が大きく奥まった特別な場所という意味を持ち、新島が理想とした学校像を示す言葉です。また、新島は「深山大沢生龍蛇（深山大沢、龍蛇を生ず）」という言葉も同じ意味で用いています。個性の異なる生徒たちを包み、育むことができる学校からは、優れた人物が育つことを新島は期待し、信じていました。

<桃李不言下自為径>



とうり
 桃李言わざれども下自ら径を為す。
 こみち

司馬遷の『史記』「李將軍列伝」の項目にある言葉です。桃李とはすももを指し、直訳すると、すももの木にはおのずと人が集まり、それが道になるとなります。これが転じて、魅力的な人物のもとには人が集うという意味で用いられています。人が自ずと集まってくるような人物でありたい、あるいは、学生たちにそのような人物になってほしいという新島の考えを表す文言です。

新島襄筆一行書「桃李不言下自為径」

<寧為玉碎恥瓦全>

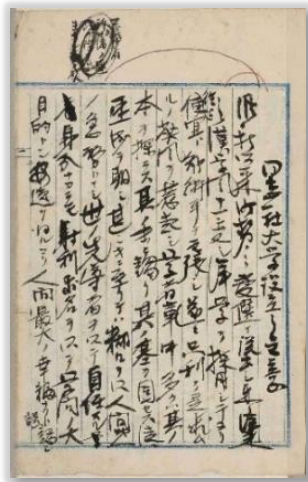


寧^{むし}ろ玉碎を為し、
瓦^{がぜん}全を恥^はず。

唐代の人物・李百葉がまとめた『北斎書』第41巻「元景安」伝に登場する言葉です。原文には「大丈夫寧可玉碎不能瓦全（大丈夫、寧ろ玉碎すべく、瓦全する能わず）」とあり、新島の言葉は少々アレンジされています。この文言にある瓦全とは瓦のように長くそのままの状態であることを指します。よって、直接解釈すれば、優れた人物は玉のように碎けるべきであって、瓦のように長く形が変わらないものとして生きるべきではないとなります。潔く生きることを是とし、漫然と生きることを恥じると、原文より強い表現を用いた新島の文言に、新島の人生観を窺うことができます。

新島襄筆一行書「寧為玉碎恥瓦全」

<新島襄が考えた同志社大学>



同志社大学設立之主意之骨案 1882年（明治15） 同志社大学設立の旨意 1888年（明治21）

新島は開校から7年後に同志社大学を設立するための募金運動に着手します。当時、大学と名の付く学校は東京大学のみでした。新島襄が書き残した資料には、なぜ大学が必要か、大学が国家や社会に対してどのような役割を果たすかを、アメリカやイギリスの事例を用いて説明しています。これを前提として、1882年、新島は5学部（宗教兼哲学、医学、法学、理学、文学）を備えた大学の設立を構想しました。そして、1888年の時点では神学、政治、経済、哲学、文学、法学などに関連した学科設置を優先と考えるようになっていきます。大学で学ぶ分野に関しては世の中の動きに合わせて変化しましたが、「基督教主義を以て、我か同志社大学徳育の基本と為す」という学生・生徒の内面に対する教育方針は不変でした。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週 3 回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

| | 京田辺校地 | 今出川校地 |
|-----|----------------------------|----------------------------|
| 火曜日 | ランチタイム (12 : 35 ~ 13 : 00) | 17 : 30 ~ 18 : 10 |
| 水曜日 | 15 : 00 ~ 15 : 45 | 10 : 45 ~ 11 : 30 |
| 金曜日 | ランチタイム (12 : 35 ~ 13 : 00) | ランチタイム (12 : 35 ~ 13 : 00) |

<同志社大学の建学の精神「良心教育」>



良心碑

同志社教育の原点は「良心」といえます。創立者の新島襄は誰よりも「良心」を高く評価しました。新島は9年間におよんだ欧米での生活を通して、キリスト教、とくにプロテスタントが文化や国民に与えた精神的感化がいかに巨大であるかを体得して帰国しました。そのひとつが「良心」で、これは「人間の目」ではなく、「神の目」を意識して初めて芽生えるものと考えられています。

新島は、日本の教育は知育に力を入れる半面、「心育」、今の言葉では「こころの教育」が疎かにされていると考えていました。そして、新島には、人は宗教的教育により「良心」を育みようやく「人間」となる、との信念がありました。「同志社大学設立の旨意」で、「一国の良心」を育成したい、と謳ったのもそのためといえます。この言葉を彫った「良心碑」は、両校地の大学正門近くにあるものを始め、日米に9基存在しています。

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



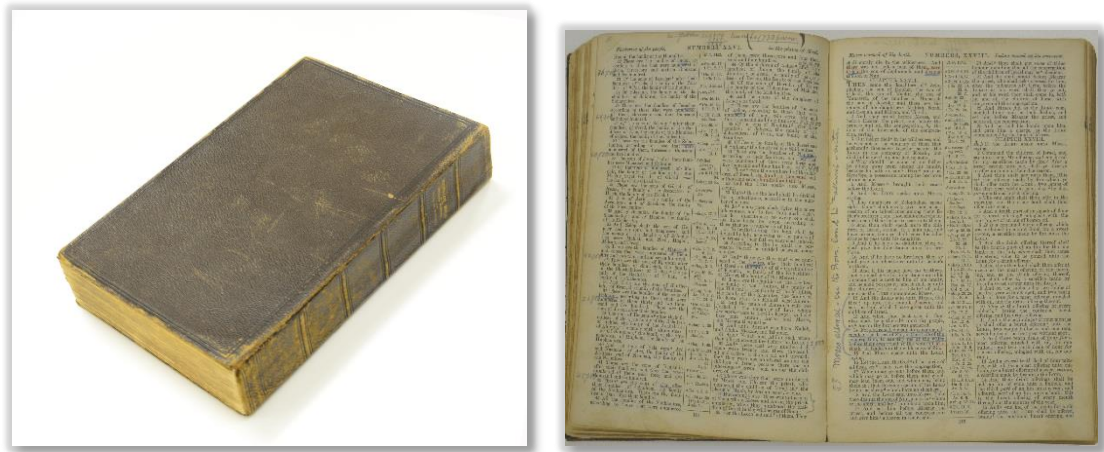
キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

展示テーマ

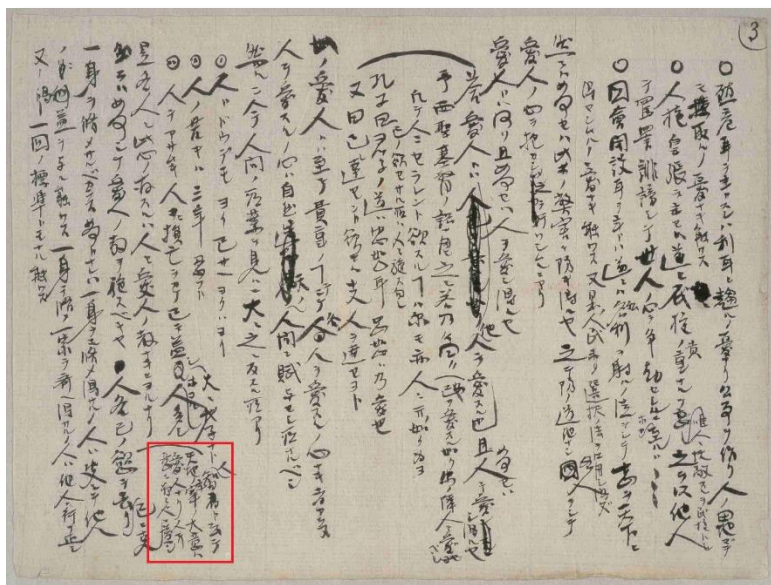
「キリスト者として」

新島襄は21歳で密出国するまで、主に江戸において武士の教養として漢学を学び、自身の教養としています。これを基礎として、以降の人生はキリスト教とともにあり、一人のクリスチャンとして、あるいは、キリスト教へと人々を導く牧師として信仰を守り、活動しました。そうした活動に関する資料を通じて、キリスト者としての新島を窺い知れる資料を展示します。



新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

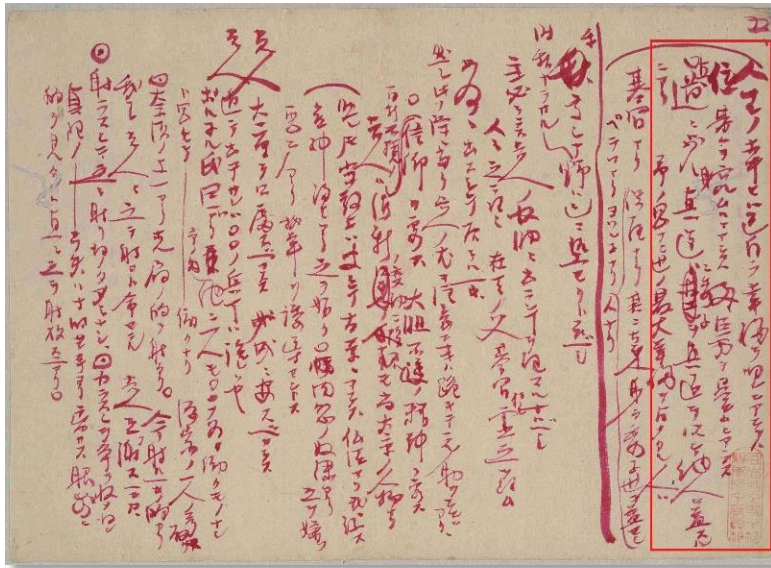
新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていたJ.M.シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854~1905) より贈られた英文の聖書です。手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。同志社は新島の在世中から自然科学や社会科学の専門学校を次々と開校させますが、その大前提としてキリスト教を徳育の基本としていました。この聖書は、同志社のキリスト教主義の歴史と重要性を示す資料の一つです。



〔赤枠内〕
 天地ノ主宰ノ大意ハ愛人ナリ人其意ニ
 敬(つつし)ミ人ヲ愛ヘシ

演説草稿「愛人論」(複製、部分) 明治時代 5枚 24×32cm

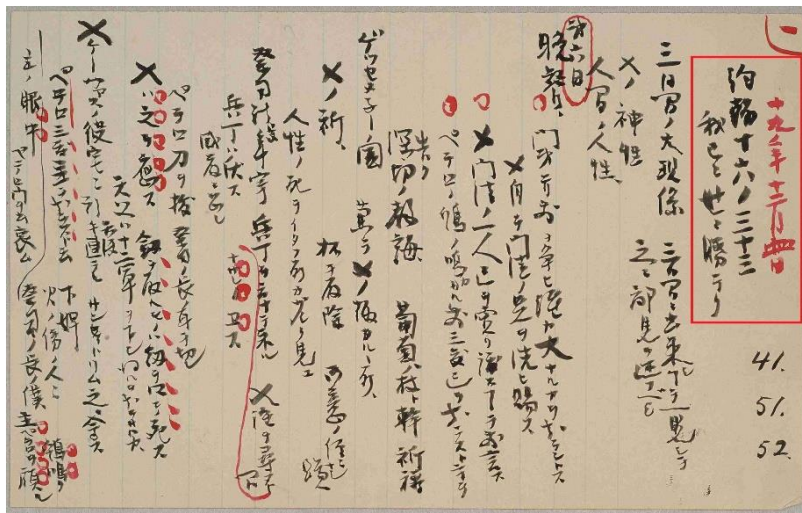
赤枠内の言葉は演説草稿「愛人論」に、宗教を越えた共通の真理である隣人愛の意義を示す言葉として登場します。新島は、この演説草稿で、当時盛んに口にされた「愛国」、すなわち、国を愛することはどういうことかをキリスト教に準じて説きました。そして、国を愛することは人を愛することであり、聖句「己ヲ愛スル如ク爾ノ隣人ヲ愛ベシ」(レビ記19章18節)や孔子の忠恕(自身の良心に忠実で、他人に思いやりがあること)の概念を示して、隣人愛の普遍性を説明しています。キリスト教と他の教えとの共通性を象徴する言葉です。【赤枠内は『PRESIDENT』第53巻第32号(2015年10月26日発行)及びキリスト教文化センター墨書「新島襄のことば」(2012年度1月)掲載】



〔赤枠内〕
 人生ノ幸ヒハ己自ラ幸福ヲ得ルニアラ
 ス
 位台ヲ究ムルニアラス富巨万ヲ量（く）
 ムニアラス
 真道ニ歩ミ身真道ニ委ネ真道ヲ以テ他
 人ヲ益スルニアリ

説教草稿「伝道」(複製、部分) 1888年 4枚 24.5×34.5cm

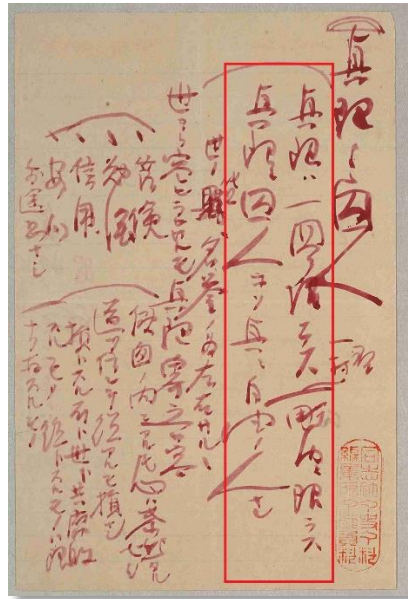
赤枠内の言葉にある真道とはキリスト教を指すと考えられます。新島は自らの幸福とは富や名声を得ることではなく、キリスト教により人を幸せにすることであると述べています。この言葉が登場する説教原稿「伝道」は、明治維新を経て、日本土着の宗教が影響力を失い、利己心に流れがちな世間に対し、文明国と対等の宗教心を培う、つまり、キリスト教を伝道する時はまさに今であるとする内容です。キリスト者である新島の生き方を示す言葉の1つです。【赤枠内は『PRESIDENT』第54巻第3号（2015年12月28日発行）掲載】



〔赤枠内〕
 十九年十二月四日
 約翰十六ノ三十三
 我已（すで）ニ世ニ勝テリ

説教草稿「我已勝世矣」(複製、部分) 1886年 4枚 12.5×20cm

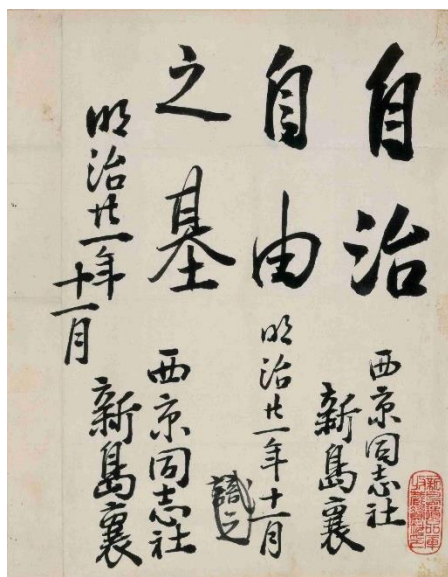
赤枠内の言葉はヨハネによる福音書 16 章 33 節にある聖句で、説教草稿「我已勝世矣」のタイトルです。この草稿は、ヨハネによる福音書の 16 章から 20 章までを用いた説教で、イエスの最後の説教から処刑されるまでを解説しています。タイトルとなっている「我はすでに世に勝っている」という言葉は、イエスの最後の説教に登場する文言で、世の中は正義ではない、迫害を受けている自身に正義があることを伝えた言葉です。明治時代のキリスト者が置かれた状況を想起させる言葉です。【赤枠内はキリスト教文化センター墨書「聖書のことば」(2011 年度 6 月) 掲載】



〔赤枠内〕
真理ハ一國ニ限ラス一郡村一町内ニ限ラス
真理之囚人コソ真ニ自由ノ人ナレ

説教草稿「真理之囚人」(複製) 明治時代 1枚 13×19.8cm

赤枠内の言葉は、信仰を抱いて生きることを説明する言葉です。ここでいう真理とはキリスト教を指し、普遍的な真理であると説明しています。さらに真理の囚人、即ちキリスト者となることが、真の意味での自由な人間になるとしています。すなわち、利己心に支配されて右往左往することなく、逆境においても正義の所在を確信して心を騒がせることなく、また、腐敗することのない徳を持ち続けることができる人間が自由な人間であると、説教原稿の中で説明しています。【赤枠内はキリスト教文化センター墨書「新島襄のことば」(2013年度5月)掲載】



三行書「自治自由之基」(複製) 1888年 1枚 23.5×17cm

新島は、「実に一國を組織する教育あり、智識あり、品行ある人民の力に抛らざる可からず」(『同志社大学設立の旨意』)という考えのもとに、同志社大学の設立に奔走しました。そして、立憲体制のもと、民主主義国家へと歩み始めようとする日本で、「自治自立の人民」、「一國の良心」となる有用な人間を教育することが、新島の目標であり、同志社の目標でした。その志を文字に具現した墨書です。その背景にある「自由」と「良心」は、同志社教育に通底する考えです。

<ラットランド演説>



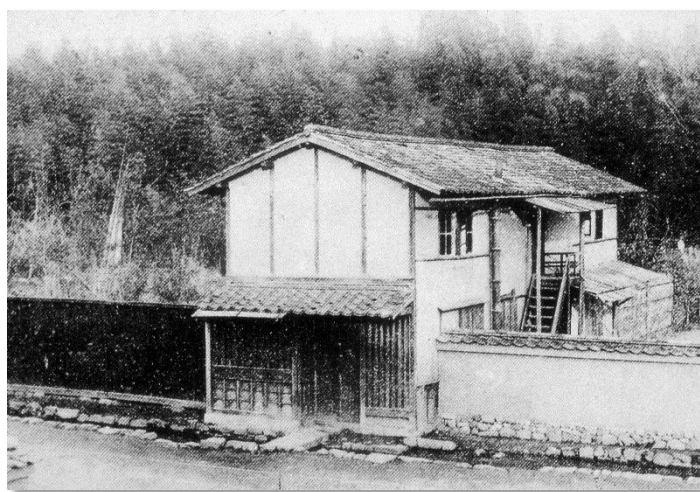
油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第65回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5,000ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<三十番教室>



三十番教室

同志社開校に際して、キリスト教主義の学校に対する市民らの反発を恐れた京都府権知事榎村正直（1834-1896）は、学校で聖書を教えないことを開校の条件としました。これに対して新島は、校外での聖書講義を制限しないことを条件に、榎村の条件を受け入れます。その後、学校と大門町通を隔てた場所にあった廃屋（現アーモスト館の旧管理人棟あたりの場所）を新島が入手し、聖書講義の教室としました。この教室が三十番教室です。

<同志社礼拝堂>



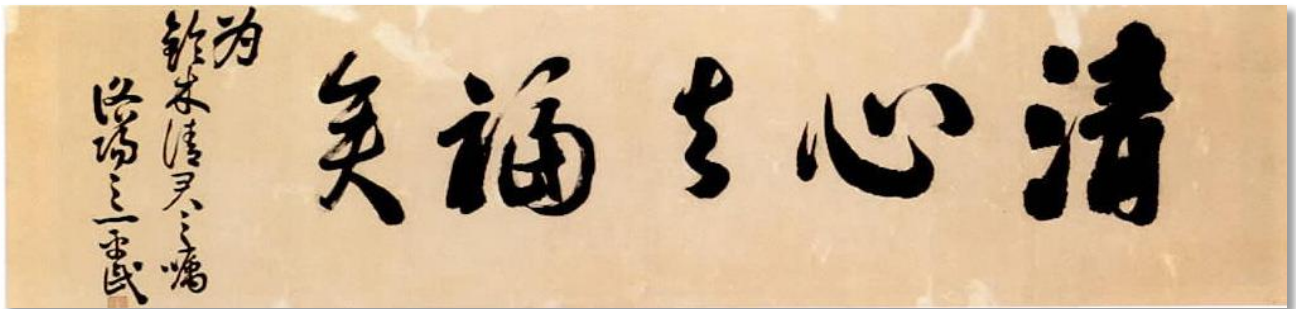
竣工当時の同志社礼拝堂



竣工当時の同志社礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885(明治18)年12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」、「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的な場を担っています。

<清心者福矣>



新島襄筆一行書「清心者福矣」

心の清き者は^{さいわ}福いなり。

この言葉はマタイによる福音書5章8節にある聖句で、イエスが山の上から群衆に向けた説教、いわゆる山上の説教(山上の垂訓)に登場します。原文ではこの言葉に「その人は神を見る」と文言が続き、信仰を抱くことにより心で神を理解するに至るとしています。なお、この書を贈られた鈴木清は北海道開拓に携わる赤心社を創設し、鈴木自身も北海道の元浦河で開拓事業に携わった人物です。

<明治期の日本キリスト教界のリーダーたちとの交流>



第3回全国基督教信徒大親睦会集合写真 1883年

1878年（明治11）から1885年（明治18）にかけて、4度、全国のクリスチャンを対象とした親睦会が開催されました。新島は少なくとも2回目と3回目に参加しています。4回目の時には海外から親睦会宛に書状を送っています。

同志社のキリスト教はプロテスタントの会衆派（組合派）ですが、この親睦会には教派を越えて人々が集い、親睦を深め、情報を交換していました。新島も他教派のリーダーたちと積極的に交流していたことが窺われます。

<初期同志社のキリスト教と自然科学>



原田直次郎作「山崎為徳肖像画」



山崎為徳著『天地大原因論』

19世紀中ごろまでは、自然神学がキリスト教と自然科学を強く結び付けていました。自然神学とは聖書のように啓示されたもの以外を通じて、理性的に神の存在を知るという考え方です。よって、法則性が明確な現象、あるいは説明不可能な現象などは神の存在と結びつけて考えられてきました。この関係に一石を投じたのが1859年のダーウィンによる『種の起源』、すなわち進化論の発表です。新島が滞在した1860年代後半から70年代前半は自然神学の影響がまだ残っていました。創立されたばかりの同志社英学校においても進化論と自然神学の関係は論じられていたようです。1878年（明治11）には東京大学と時を同じくしてJohn Thomas Gulickを招いて進化論の講義をしています。また、英学校第1期生山崎為徳が1880年（明治13）に出版した『天地大原因論』は自然神学を論じたものです。

＜京田辺キャンパスのクリスマス・ツリーと

クリスマス・イルミネーション点灯式＞



京田辺クリスマス・ツリー



今出川点灯式



京田辺点灯式

京田辺キャンパスではローム記念館前に植えられたモミノキがクリスマス・ツリーの役割を担います。11月下旬から12月初旬に、毎年恒例のクリスマス・イルミネーション点灯式が両キャンパスで行われ、同志社学生聖歌隊による讃美歌が厳かな雰囲気をつくるなか、点灯の瞬間には集まった多くの学生や市民から大きな歓声が上がります。また、点灯式の参加者には廣垣俊樹理工学部教授のゼミ及び環境保全・実験実習支援センターの協力を得て、京田辺キャンパスで伐採した竹で作った同志社徽章入りの燭台を参加者にプレゼントしています。

＜同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝（キリスト教文化センター主催）＞



キャンドル点灯



聖書物語劇



聖歌隊

同志社新島記念講堂で毎年12月第2土曜日に行われる同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝は、地域の方々と同志社の学生や教職員が、ともに作りあげる大切な行事となっています。パイプオルガンの荘厳な音色による前奏から始まり、讃美歌合唱、開会祈祷、聖書物語劇と続きます。劇中では、京田辺市民合唱団、田辺少年少女合唱団コスモス及び同志社学生聖歌隊による合唱やハンドベル・クワイアによる演奏が行われ、その後、牧師による説教と祝福などが行われます。

<クリスマス・イブ礼拝>



クリスマス・イブ礼拝（今出川校地）



クリスマス・イブ礼拝（京田辺校地）

キリスト教文化センターではクリスマス・イブ礼拝を両校地で行っています。今出川校地では、同志社教会との共催で同志社礼拝堂において2013年から実施しています。京田辺校地では、同志社京田辺会堂が献堂された2015年に初めてのクリスマス・イブ礼拝を行いました。大学のキャンパスで迎えるクリスマスとして、学生、教職員だけではなく広く地域の方々も集って、讃美歌を歌い、聖書のことばに耳をかたむけ、イエス・キリストの降誕をともに喜び、祝っています。

資料リスト (全て複製)

| 資料名 | 作者・著編者 | 年代 | 法量 (cm) | 員数 | 所蔵先 |
|-----------------|--------|--------------|-----------|----|-------------|
| 展示テーマ「教育者として」 | | | | | |
| 雑記帖 | 新島襄 | 1883年 | 19.5×12 | 1冊 | 同志社社史資料センター |
| 自責の杖 | - | 明治時代 | 最大60 | 3片 | 同志社社史資料センター |
| 横田安止宛新島襄書簡 | 新島襄 | 1889年11月23日付 | 18×169 | 1通 | 同志社社史資料センター |
| 演説草稿 | 新島襄 | 1888年4月12日 | 21×33 | 4枚 | 同志社社史資料センター |
| 徳富猪一郎宛新島襄書簡 | 新島襄 | 1889年11月9日付 | 15.9×81.1 | 1通 | 同志社社史資料センター |
| 新島襄遺言 | 徳富猪一郎写 | 1890年1月21日付 | 24.5×200 | 1巻 | 同志社社史資料センター |
| 展示テーマ「キリスト者として」 | | | | | |
| 新島襄旧蔵聖書 | - | 年不詳 | 21×14 | 1冊 | 同志社社史資料センター |
| 演説草稿「愛人論」 | 新島襄 | 明治時代 | 24×32 | 5枚 | 同志社社史資料センター |
| 説教草稿「伝道」 | 新島襄 | 1888年 | 24.5×34.5 | 4枚 | 同志社社史資料センター |
| 説教草稿「我已勝世矣」 | 新島襄 | 1886年12月4日 | 12.5×20 | 4枚 | 同志社社史資料センター |
| 説教草稿「真理之囚人」 | 新島襄 | 明治時代 | 13×19.8 | 1枚 | 同志社社史資料センター |
| 三行書「自治自由之基」 | 新島襄 | 1888年11月 | 23.5×17 | 1枚 | 同志社社史資料センター |

写真リスト

| ポスターパネルタイトル | 写真・画像 | 年代 | 所蔵先 |
|--------------------------------------|---|-----------------------|---|
| 展示テーマ「教育者として」 | | | |
| 南山義塾と新島襄 | 新島襄筆草稿「祝言」 | 1882年 | 同志社社史資料センター |
| | 南山義塾跡碑 | 昭和時代 | 同志社社史資料センター |
| よしの山 花咲く頃の 朝な朝な 心にか かる 峰のしら雲 | 横田安止宛新島襄書簡 集合写真：自責の杖、和歌「よしの山」と 2年生上級組 | 1889年12月30日付 1880年 | 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター |
| 深山大沢 | 横田安止宛新島襄書簡 大学設立募金に関する演説の草稿 | 1889年12月30日付 明治時代 | 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター |
| 桃李不言下自為徑 | 新島襄筆一行書「桃李不言下自為徑」 | 明治時代 | 同志社社史資料センター |
| 寧為玉碎恥瓦全 | 新島襄筆一行書「寧為玉碎恥瓦全」 | 明治時代 | 同志社社史資料センター |
| 新島襄が考えた同志社大学 | 同志社大学設立之主意之骨案 同志社大学設立の旨意 | 1882年 1888年 | 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター |
| チャペル・アワー | 京田辺校地 言館 (KOTOBA-KAN) 礼拝堂 | 現代 | キリスト教文化センター |
| 同志社大学の建学の精神「良心教育」 | 良心碑 | 現代 | キリスト教文化センター |
| 同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義 | キリスト教主義と教育理念の関係を表す相 関図 | 現代 | キリスト教文化センター |
| 展示テーマ「キリスト者として」 | | | |
| ラットランド演説 | 油彩画「ラットランド演説」 グレイス教会 | 昭和時代 現代 | 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター |
| 三十番教室 | 三十番教室 | 明治時代 | 同志社社史資料センター |
| 同志社礼拝堂 | 竣工当時の同志社礼拝堂 竣工当時の同志社礼拝堂内部 | 1880年代 1880年代 | 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター |
| 清心者福矣 | 新島襄筆一行書「清心者福矣」 | 明治時代 | 同志社社史資料センター |
| 明治期の日本キリスト教界のリーダーたちとの交流 | 第3回全国基督教信徒大親睦会集合写真 | 1883年 | 同志社社史資料センター |
| 初期同志社のキリスト教と自然科学 | 原田直次郎作「山崎為徳肖像画」 山崎為徳著『天地大原因論』 | 明治時代 1881年 | 同志社社史資料センター 同志社大学人文科学研究所 |
| 京田辺キャンパスのクリスマス・ツリーとクリスマス・イルミネーション点灯式 | 京田辺クリスマス・ツリー 今出川点灯式 京田辺点灯式 | 現代 現代 現代 | キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター |
| 同志社京田辺クリスマス燭火讚美礼拝 | キャンドル点灯 聖書物語劇 聖歌隊 | 現代 現代 現代 | キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター |
| クリスマス・イブ礼拝 | クリスマス・イブ礼拝(今出川校地) クリスマス・イブ礼拝(京田辺校地) | 現代 現代 | キリスト教文化センター キリスト教文化センター |



同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第8期展

「新島襄の遺した言葉」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2018年9月14日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture